

はしがき

現代の受験生にとって、漢文という古典は、決して取り組みやすい受験科目ではない。はつきり取り組みにくい科目と言ってよいのだが、しかし、その取り組みにくさが文章体系としての漢文の難しさに由来するわけではないという点に本質的な問題がある。漢文は一般的には、受験という当座の必要がなければほとんど顧みられることのない、言わば趣味的科目としてしか認知されておらず、そのことが漢文を必要とする受験生の学習意欲をもそぐ結果となっているのだが、問題は、それが受験生の問題というよりも、大きな文化的時代状況としてある程度の必然性をもっているという点にある。

教養としての漢文に接触することに意味を見いだす人間がほとんどいないのである。そして、それは、横文字文化の横行によって漢字という文字への愛着が薄れつつあること以上に、漢文の作り上げている文化世界、例えば忠孝信義といった価値を中心据えた世界が、私達の生きている現代という時代から急速に消えつつあるという点に由来している。

つまり、比喩的に言えば、過去を完全に過ぎ去ったものとして葬り去ることによって、先へ先へと進みゆくエネルギーを作り出している現代という時代が、漢文という世界を博物館の世界に密閉してしまっているのであり、まさしくそのような時代性こそが漢文への取り組みにくさを作り上げているのである。受験科目としては易しいと言ってよい漢文が、多くの受験生から敬遠されてしまうのも、この点に由来している。漢文化を受容する素地が私達の生きる世界から消えていく度合にに応じて、漢文は難しくなっているのである。

このような状況に置かれている私達が、受験科目としてであれ、ともかくも漢文の世界に向きあっていくため

には、さし当ってはまず、現在の私達と漢文のつくりあげている世界とのはるかなる距離を、はっきり確認することが出発点となる。漢文を読んでいく上で誤読がありうるとしたら、それはこの距離についての無自覚が作りあげるものと考えてよい。漢文の世界は、もちろん中国の古典であると同時に日本の古典でもあり、漢文に象徴される中国文明が、日本の歴史全体の中では、近・現代における西欧文明の果たした役割よりもはるかに大きな役割を果たしたのは事実である。しかし、だからと言って私達の現在と漢文の世界とが近い距離にあるわけではない。この距離に対する無自覚こそが漢文を読解していくうえでの一番の落とし穴となる。この距離に対する自覚を、一つ一つの問題に突きあたる過程で、よりはっきりした形にしていくこそが漢文学習の最良の道であり、この問題集がその一助になることを願っている。

1 『列子』湯問篇

▼解答と配点▲

問一	⑦すなはち	①あたはず	(4点×2)	8点
問二	A—2	B—1	C—6	D—5
			(4点×4)	16点
問三	真昼になると、手を熱湯の中に入れたように熱い。			(a) c各5点
				15点
問四	孰為汝多知乎。			(5点)
				(6点)

▼本文解説▲

列子は、名を禦寇といい、戦国時代の人で道家の思想家に数えられる。その著書とされる『列子』は、道家思想の根本をなす「虚静」「無為」などの考え方を、たくみな寓言を用いて説いたものである。問題文は、道家と対立した儒家の祖孔子を登場させ、太陽の遠近をめぐる二人の子供の言い争いすら仲裁できなかつた、と孔子、そして儒家の知恵の無さを語っている。

▼書き下し文▲

孔子東遊す。兩小兒の弁闘するを見て、其の故を問ふ。一兒曰く、「我以へらく、日の始めて出づる時、人を去ること近くして、

日の中する時遠し」と。一兒以へらく、「日の初めて出づるや遠くして、日の中する時近し」と。一兒曰く、「日の初めて出づるや、大なること車蓋のごとし。日の中するに及びては、則ち盤盂のごとし。此れ遠き者小にして近き者大なるが為ならずや」と。一兒曰く、「日の初めて出づるや、滄滄涼涼たり。其の日の中するに及びては、湯を探るのごとし。此れ近き者熱くして遠き者涼しきが為ならずや」と。孔子決すること能はず。兩小兒笑ひて曰く、「孰か汝を知多しと為せるや」と。

▼全文解釈▲

孔子が東の方へ出かけた。その折、二人の子供が言い争いをして見ているのを見かけて、言い争いの理由をたずねた。すると一人の子供が言うには、「私は、太陽が昇ったばかりの時は、我々から近くて、真昼になると遠くなると思うのだ」と。もう一人の子は、「太陽は昇ったばかりの時には遠くて、真昼になると近くなると思う」と言う。先の子が言うには、「太陽は昇ったばかりの時、馬車に立てる傘のように大きいのが、真昼になると、おわんのように。これは、遠くにあるものは小さく見えて、近くにあるものは大きく見えるからではないか」と。もう一人の子が言った、「太陽が昇ったばかりの時は、冷え冷えとしていて。しかし真昼になると、湯の中に手を入れたように熱い。これは、近くにあると熱く感じられて、遠くにあると涼しく感じられるからではないか」と。孔子は、(どちらの考えが正しいか)判断することができなかった。

すると二人の子供が笑って言った、「誰がお前さんを物知りなんていったのだ」と。

▼解釈のポイント▲

游 ①およく、②あそぶ(旅行する・他国にゆく)の意味がある。

ここでは②の意味。

故 「理由」の意味。

以 「以為」と同じで、「思う・考える」の意味。

如 ①もシ……文頭に位置して仮定をあらわす。

如——、則……。(もし——したら、くだ。)

②しく……比較形・最上形

A不如B。(AはBに及ばない。)

無如A。(Aに及ぶものはない。)

③ごとし……のようだ。

A如B。(AはちようどBのようである。)

④ゆく……動詞で「行く」の意味。

ここでは③の用法。

なお、「若」にも①③と同様の用法がある。覚えておこう。

①上の語句(仮定・確定の条件)を受けて下へつなく働きて、多く「——則」のように用いられる。

②上の語句(多くの主語)を提示する働きで、多く「——則」のように用いられる。

ここでは①の用法。

なお、「即・便・乃・輒」なども、「すなはち」と読む。あわせて覚えておこう。

為 ①ため(二)、②つくル、③をさム(治と同じ)、④なル、⑤

なス、⑥たり(断定)、⑦る・らル(受身)など数多くの読みをもつ最重要語である。ここでは①「ため」の読みで、原因・理由を示す。

乎 ①文末・句末にくると、「や・か」と読んで、疑問・反語・詠嘆などの意味をあらわす。

②文中にはいると、「於」と同じく、前置詞の働きをするが、読まない。

不 能——「できない」の意味。「不」の否定詞が無い場合は、「よく」と読み、「(うまく)できる」の意味になる。

孰為汝 多知乎

「孰」は、①たれカ(誰が) ②いづレカ(どちらが・どれが)と読む疑問・反語の副詞。

ここでは、①の疑問の用法である。

不 能——「できない」の意味。「不」の否定詞が無い場合は、「よく」と読み、「(うまく)できる」の意味になる。

孰為汝 多知乎

「孰」は、①たれカ(誰が) ②いづレカ(どちらが・どれが)と読む疑問・反語の副詞。

孰為汝 多知乎

「孰」は、①たれカ(誰が) ②いづレカ(どちらが・どれが)と読む疑問・反語の副詞。

ここでは、①の疑問の用法である。

「為」は「なス」と読む場合、二つの用法がある。

①為——……を(する・行なう)

②為——……を(する・みなす・思う)

ここでは②の用法。

「汝」は「お前」の意味。「若・女・爾・而」なども「なんぢ」と読むことがある。したがって、この文の訳は、

「誰があんたを物知りだと言ったのですか」となる。